

# *Jan Jiracek von Arnim Piano Recital*

## ヤン・イラチェック・フォン・アルニンピアノリサイタル

共演：藤原浜雄 (Vn)、土岐祐奈 (Vn)、田原綾子 (Va)、銅銀久弥 (Vc)

2019年3月29日(金) 18:15開場 18:45開演

### 第一生命ホール



#### ヤン・イラチェック・フォン・アルニン

ベルリン芸術大学卒業。ハンス・ライグラフに師事し、アルフレッド・ブレンデルやブルーノ・レオナルド・ゲルバーなどのマスタークラスを受ける。

10歳の時にハンブルクのスタインウェイ・コンクールで第一位を獲得。

ブゾーニ・コンクール（イタリア）、マリア・カナルス・コンクール（スペイン）で最上位を獲得、第10回ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクール（アメリカ）で入賞。

ヨーロッパ、アメリカ、アジア各地でのリサイタルや、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、サンクトペテルブルク・フィルハーモニー交響楽団を始めとする有名オーケストラとの共演など、幅広く活躍している。

2001年にウィーン国立音楽大学のピアノ科教授に任命され、同大学史上最年少の終身教授となる。

ロンドン国際ピアノコンクール、ブゾーニ国際ピアノコンクール、若い音楽家のためのチャイコフスキー国際コンクールなどの国際ピアノコンクールの審査員に頻繁に招聘されている。2011年より、世界で最も権威ある音楽コンクールの一つであるウィーン国際ベートーヴェンピアノコンクールの芸術監督および審査委員長を務める。

《プログラム》

F. シューベルト：3つのピアノ曲（即興曲） D.946

*F. Schubert : Drei Klavierstücke D.946*

I. *Allegro assai*

II. *Allegretto*

III. *Allegro*

J. ハイドン：ソナタ 変イ長調 Hob.XVI:46

*J. Haydn : Klaviersonate As-Dur Hob.XVI:46*

I. *Allegro moderato*

II. *Adagio*

III. *Presto*

F. リスト：バラード第2番 ロ短調 S.171 R.16

*F. Liszt : Ballade Nr.2 h-moll S.171 R.16*

W. A. モーツァルト：ピアノ協奏曲第12番 イ長調 K.414

*W. A. Mozart : Klavierkonzert Nr.12 A-dur K.414*

I. *Allegro*

II. *Andante*

III. *Allegretto*

### シューベルト：3つのピアノ曲（即興曲） D.946

フランツ・シューベルト（1797-1828）が後期になって生み出した一連のピアノ小品は、明快な形式のうちにも自由な幻想の広がりや豊かな詩情を湛えた名品揃いで、以後の19世紀のロマン派の作曲家の重要なジャンルとなる性格的小品の先駆けになった点で、ピアノ音楽史上においても重要である。『楽興の時』や2集の『即興曲集』（作品90と作品142）が特に有名だが、本日の『3つのピアノ曲』も後期のこのジャンルの代表作で、シューベルト最後の年となった1828年の5月に書かれた第1、2曲に、その前年に書かれた第3曲を組み合わせて、彼の死後40年経った1868年にブラームスの校訂によって初めて出版された。『楽興の時』や2集の『即興曲集』よりさらにあとの成立だけに、孤高で詩的な音楽性、大胆な和声語法、厚みある響きといった点で後期の彼の作風の特徴が一層顕著に示されている。シューベルト自らは題を付していないが、しばしば“即興曲”とも呼ばれている。

第1曲（アレグロ・アッサイ）は変ホ短調という稀な調を主調としている点が興味深い。何かに駆り立てられているような落ち着きのない主部と、叙情的なエピソードとが対照される。なお最初の稿ではエピソードは2つ置かれ（ロ長調のアンダンテと変イ長調のアンダンティーノ）、全体がA B A C Aの形式をとっていたが、シューベルトはのちにアンダンティーノ以降の部分をカットしてA B Aの形にした。そのためこの曲には2つの稿が存在する。第2曲（アレグレット）は変ホ長調、リート風の簡素な主題による叙情的な主部と2つの不安げなエピソードが交替する。第1エピソードは16分音符の動きが心の動揺を映し出し、第2エピソードでは変イ短調とロ短調の調的な響きの変化が孤独感を浮かび上がらせる。第3曲（アレグロ）はハ長調、シンコーションを生かした主題を中心とした気紛れな性格の主部に対し、変ニ長調に転じる中間部は和音を連ねた悠々たる運びが天国的な響きを作り出す。

### ハイドン：ソナタ 変イ長調 Hob.XVI: 46

ヨーゼフ・ハイドン（1732-1809）が18世紀後半において、いわゆる古典派様式の確立と完成に測り知れない役割を果たしたことは改めて言うまでもないだろう。とりわけ交響曲や弦楽四重奏曲のジャンルでの彼のそうした役割は重要なものがあるが、鍵盤楽器のためのソナタのジャンルにおいても、ハイドンは新しい様式によるソナタのあり方を追求した。初期から後期までに生み出された実に数十曲に及ぶ彼の鍵盤ソナタのスタイルの変遷を辿ると、ハイドンが様々な角度からの実験を重ねながらソナタの様式の可能性を追求していったことが浮かび上がってくる。さらにまた当時の鍵盤楽器は、前のバロック時代に用いられていたチェンバロからピアノの前身にあたるいわゆるフォルテピアノへと移行していた時期にあたっており、そうした楽器の変遷もハイドンの様式の多様な実験に影響を与えていた。

本日演奏される変イ長調のソナタは、出版されたのは1788年になってからのことだが、作品の成立はずっと早く1760年代後期と推測されている。しかし作風は、1770年代以降のソナタにおける成熟した書法をすでに窺わせるような充実ぶりを示している。第1楽章（アレグロ・モデラート）は優美な音の流れが美しいソナタ形式楽章で、装飾や16分音符の動きが高雅な趣を生み出す一方、劇性にも欠けていない。第2楽章（アダージョ）は変ニ長調、落ちついたポリフォニックな動きのうちに叙情美を湛えたソナタ形式の緩徐楽章である。第3楽章（プレスト）は16分音符を中心とした快速かつ軽快な動きで運ばれるフィナーレである。

## リスト：バラード第2番 口短調 S.171 R.16

フランツ・リスト（1811-86）はハンガリー生れで、ハンガリーの愛国的な作品も書いているが、もともと血筋はドイツ系であり、子供時代から神童ピアニストとしてパリをはじめとして国際的な活動を行なった一方、作曲家として名を成した壮年期以後はワーグナーなどともに新ドイツ派の作曲家として19世紀後半のドイツにおける革新陣営を代表する立場で活動するなど、インターナショナルな音楽家としてきわめて広い視野をもってロマン主義運動を推し進めていった。とりわけ詩的・絵画的な要素と音楽とを結び付ける新しいロマン主義的な標題音楽のあり方を確立した功績は大きく、ピアノ曲においても演奏技巧の追求とともにそうしたロマン的な標題音楽の表現法を様々に開拓して、ロマン派のピアノ音楽に新たな地平を拓いている。

1853年の所産であるバラード第2番も、具体的な標題内容は明記されていないものの、激しさと叙情とが交錯する即興風な運びのうちに次々と繰り広げられるエピソードの展開が伝説的な英雄の物語を語っていくような叙事的な特質を持っている点、リストのロマン主義的な標題的性格、彼らしい文学的・詩的な発想が背景に感じられる作品である。

## モーツァルト：ピアノ協奏曲第12番 イ長調 K.414

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756-91）は1781年に故郷ザルツブルクを捨て、ウィーンに移住した。束縛の多いザルツブルクでの宮廷音楽家としての仕事に嫌気がさしていた彼は、前々から他の地でのポストを探していたのだが、ザルツブルク大司教と決定的な衝突をしたことによって、特に何のポストのないままにこのウィーンという大都会に移ることを決意したのである。こうして新天地でのフリーの音楽家としての活動が始まったわけだが、宮廷や教会に仕えることで音楽家としての身分が保証されていたこの時代、かかる行動はいわば大きな冒険であった。モーツァルトは収入を得るためにまずピアノ教師およびピアニストとしての活動を行なうことで、生活を切り開いていく。これは成功し、ほどなくピアニストとしてのめざましい活躍ぶりによって、ウィーンでの地位を確立するのだった。とりわけ自身が主催する公開の予約演奏会での自作自演のピアノ協奏曲はウィーン音楽界の大きな話題となり、モーツァルトは花形としてもはやされるようになる。

本日演奏される第12番イ長調 K.414はそのウィーン時代の最初に書かれた3曲セットのピアノ協奏曲（第11～13番；K.413～415）のひとつで、3曲の中では最も早く（第11番 K.413よりも先に）1782年秋に書かれており、彼のウィーン時代のピアノ協奏曲の記念すべき第1作にあたる。これら3曲にはウィーンの聴衆に受け入れられようとする当時のモーツァルトの意図が様々に現れているが、その中でこのイ長調の曲は最も優美で親密な性格を持っている。管楽器はオーボエとホルン2つずつだけという室内楽的な編成の親密かつ優美な曲で、それらの管楽器を省いてピアノと弦のみの編成で演奏することも可能になっている。本日はピアノと弦の各パートひとりずつの弦楽四重奏編成で演奏されるが、こうした室内楽形態による演奏は当時からしばしば行われていた。

第1楽章（アレグロ）は典型的な協奏ソナタ形式で、親しみやすい主題を中心とした伸びやかで明快な楽章である。第2楽章（アンダンテ）はニ長調、この曲が書かれる少し前に死去したヨハン・クリスティアン・バッハ（大バッハの末子）の主題を用いたしっとりとした趣の緩徐楽章で、少年時代に大きな影響を受けたこの先輩へのオマージュの意味合いがあるのかもしれない。第3楽章（アレグレット）は軽妙快活な主題を持つロンド・フィナーレである。

（てらにし もとゆき・音楽評論家）